

◎石叫 ■ 「正しすぎてはならない」

伝道者の書に、「あなたは正しすぎてはならない。なぜあなたは自分を滅ぼそうとするのか」（新改訳、七・16）という不思議な言葉がある。今回は高橋秀典氏の『正しすぎてはならない』（いのちのことば社、二〇一〇）から紐解く。

「聖書には、『主の教えを、守るなら、あなたはしあわせになる』という趣旨のことが繰り返し記されていますが、これは本来、主を愛すること自体にしあわせがあるという意味ですが、しばしば、『私たちの側に正義があれば、しあわせになる』という因果応報の教えと混同されるように思います。それは神ではなく、自分を善悪の基準とした最初の人アダムの罪そのものです。彼は、神から、『あなたは、食べてはならない、と命じておいた木から食べたのか？』と問われただけで、『あなたが私のそばに置かれたこの女が・・・』（創世記三・11&12）と神と女を非難しました。今も、同じような夫婦喧嘩が続いています。しかし、多くの人は、反省もできず、なお自分の正当性を主張することでしょう。

これは、すべての人と人との関係、また国と国との関係にも適用できる原則です。私の学生時代は、学生運動が急速にしぼんでゆく時期でした。全学連と呼ばれた運動は、互いの正義を主張しながら、分裂に分裂を重ね、自滅して行きました。私はそれを白けた目で見ていました。ですから、私は聖書の教えを聞いても、『また空しく正義を主張するのか・・・』と警戒していましたが、米国留学中、多くのクリスチャンの謙虚な姿勢に触れて、見方を改めることができました。あるひとりの若く目の輝いた女性が、自分の弱さを率直に認めながら、真心から、『わたしはイエス様なしには生きていけない』と言っているのを聞いた時、そこに彼女を生かしているイエスを認めざるを得なくなりました。そこには自分の正当性を主張して闘うような姿勢はまったくなかったからです。

先のブッシュ政権下でのイラク戦争などを見ると、多くの日本人が不安を感じるのも分かります。しかし、聖書は初めから、自分の正義を主張することが罪の始まりだと記しています。本来、人は、絶対的な神の前では、自分の無知と無力を心から認め、謙遜になることができるはずなのです。人の罪が、人を謙遜にするはずの信仰さえ、争いの原因にしようという現実がある中で、『正しすぎてはならない』という伝道者の教えの鋭さに目が開かれます』